

原子力規制委員会
敦賀発電所敷地内破砕帯の調査に関する有識者会合
第5回評価会合後の臨時記者会見録

- 日時：平成 25 年 5 月 15 日（水）16:20～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：島崎 邦彦 委員長代理

<報告事項>

- 司会 それでは、只今から評価会合を踏まえて会見を行いたいと思います。まず最初に島崎委員長代理から御説明、御報告がございます。
- 島崎委員長代理 今日先程、日本原電敦賀発電所の敷地内破砕帯調査について有識者会合の評価書の取りまとめをいたしました。昨年 11 月からこれまで学会に御推薦をいただいた 4 名の有識者の方々に御協力いただきまして、現地調査、5 回の評価会合、ピアレビュー、また事業者の意見も聞きながら検討を行ってまいりました。その結果、現時点で得られた知見からは敦賀発電所の敷地内に存在する D-1 破砕帯ですが、これは耐震設計上考慮すべき活断層と考えるべきであるという評価に至りました。この評価書は私が預かりまして速やかに原子力規制委員会に報告すると共に、委員会として対応を審議していく予定でございます。

<質疑応答>

- 司会 それでは、只今から皆さま方の御質問をお受けしたいと思います。いつものことですが、挙手の上、マイクが届いてから所属とお名前、それから、質問をお願いしたいと思います。質問は簡潔にお願いします。
それでは、質問のある方は挙手をお願いいたします。
- 記者 共同通信のシズメです。
最後に至るまで日本原電は納得していなかったのだと見えるのですけれども、それについてどういうふうに関心、感じていらっしゃいますか。
- 島崎委員長代理 我々は科学的な判断を行うことが任務でありますので、それに従って最終的な結論に至ったということでもあります。
- 記者 もう一点、宮内先生からも先程ありましたが、安全解と科学解、科学解を求められていると聞いていたらちょっと違うものを求められていたというような声も、違う表現でもあったかと思うのですが、そこら辺はいろいろ反省点というか、今後の改善点は今、どういうふうにお感じでいらっしゃるのでしょうか。
- 島崎委員長代理 いろいろ具体的な御提案を頂いておりますので、今後それらを十分考慮して反映した形で進めていきたいと考えております。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

○記者 産経新聞、アマノです。

最後の結論の「耐震設計上考慮する活断層である」というところを会合の中で修正するとおっしゃっていましたがけれども、活断層であるという部分の断言は変わらないわけですか。

○島崎委員長代理 変わりません。

○記者 修正というのはどのように修正となるのですか。

○島崎委員長代理 最終的などころではなくて、それに至る途中のところの修正だと思います。

○記者 もう一点、1号炉の直下を走る破砕帯については今後検討していくとありますけれども、これはまたスケジュール的には現地調査なり、また会合するなり、こういった方向で進むのでしょうか。

○島崎委員長代理 まずそれに関しては現在事業者さんの方から報告がございませんので、それを待つという形になると思います。予定はありません。

○記者 最後にすみません、1号機については調査を待つということで、2号機については原電が6月末までの報告書を待つほしいと再三言っていましたが、この辺の待てなかった理由は何でしょうか。

○島崎委員長代理 別に待てる待てないということではなくて、原電さんの今までの報告書を十分審議した結果、結論がまとまったのでまとめたということです。

○記者 ありがとうございます。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

○記者 読売新聞のフナコシです。

現地調査が12月なので、審議が半年かけてこのような議論に至った。先生がおっしゃったように、かなりピアレビューを経ていろいろとやってきて、6ヶ月かけて終わった率直な感想をお聞かせいただけますか。

○島崎委員長代理 実際やってみないと分からないことがありますし、どういうデータか、あるいはどういう内容でどういう形でどういうポイントがあるかとか、それは個々場所によって違います。そういうことを見つつ、それぞれの場所あるいはそれぞれの時点なるべく適切な形で審議を進めていきたいと思いましたが、結果として6ヶ月かかったということになります。

○記者 もう一点、先生は最後の方で、安全性が低い状態に敦賀原発があつて、これまで事故がなかったのが幸いとおっしゃっていたのですがけれども、今日午前中でも島崎さんは、もんじゅに対してかなり安全意識が低いというような御発言をされていたのですがけれども、日本原電に対しても同じように安全性に対しての意識についてどういうふう

お考えでしょうか。

○島崎委員長代理 安全文化みたいなものとは違った話でありまして、我々は事業者さんと協力しつつ、安全性に問題があるものに関しては何とか安全性を高めるようにしていくのが我々の仕事だと思っております。

○司会 よろしいですか。では、次の方。

○記者 朝日新聞のコイケと申します。

最後に4人の先生に御感想をお聞きした時に、皆さん結構難しいジャッジだったということをおっしゃっていましたが、島崎先生御自身としては難しかったかどうかというのを率直にお聞きしたいのです。

○島崎委員長代理 学問的な面だとか科学的な面だとかいろいろな切り口があると思います。それから、誰が調査をしているかということもありますので、いろいろな制約を考えて皆さんなかなか難しいと言われたのだと思って、それはそういう面があると思います。

○記者 もう一点、これはお答えできれば結構なのですが、最後に島崎先生が、これで安全が低い状態から1歩踏み出せるとおっしゃったのですが、1歩踏み出すというのは具体的にはどういうことなのでしょう。

○島崎委員長代理 要するに現実の状況が分かったということは、もし対策が必要であればそれを考え得る状況になったということ、そういう意味で申し上げました。

○司会 それでは、次の方。

○記者 電気新聞のヤマダです。

会合の最後で新たな知見が見つかったらまたやり直すとおっしゃっていましたが、新たな知見を多分原電はそのうち提出するのでしょうか、新たな知見なのかそうではないのかというのはどういった判断基準をもって判断されるのでしょうか。

○島崎委員長代理 実際どういう内容の新しい知見が出てくるのかが分かりませんので何とも申し上げようありませんけれども、判断基準はいつも変わらない、同じものだと思います。

○記者 判断されるのは島崎さん御自身、お1人で判断されるのか、又は定例会か何かにかけて判断するのか、どういうふうに行われるのですか。

○島崎委員長代理 それは内容にもよるし、いつ出てくるかにもよりますので、ひょっとしたら私が辞めた後に出てくれば当然私は判断する立場にありませんから、それによると思います。

○司会 では、次の方。

○記者 NHKのスガヤです。

今回報告書を取りまとめたわけですが、この報告書を日本原電にどのように受けとめてほしいとお考えでしょうか。

- 島崎委員長代理 日本原電さんが調査をしていただいた、それを科学的に評価するところというふうになったということなので、これまでなるべく分かりやすく説明もしてきましたし、そのような報告書にすべく努力した次第ですので、そのまま受け取っていただければと思います。
- 記者 報告書にはやはり原電さんの調査の手法ですとかロジックでは不十分だということ指摘されていますけれども、そこで不十分だと指摘されている部分がもし埋まるような材料があれば、それはまた見直すという形になるという理解でよろしいでしょうか。
- 島崎委員長代理 先程から申し上げていますように、もちろんだという内容で出てくるかなのですけれども、新しい知見と先程御質問がありました、結局それと同じことです。
- 記者 最後に、最後4人の先生方もそれぞれの御意見をお話しになって、いろいろと御提案もあったと先程おっしゃっていましたが、具体的にこの後もまだほかの原発での断層の調査が続くと思いますが、改善をしていきたい点ですとかこういうふうに変えていきたい点はあるのでしょうか。
- 島崎委員長代理 いろいろな意見というか、いろいろな御提案がありましたので、一つ一つきっちり考えていきたいと思っています。当然今後の調査あるいは審査、議論に役立てたいと思っています。それぞれ内容、どういうデータが出てくるかとか、個別によってどう進めるかということも変わってきますので、適切に処理していきたいと思っています。

○司会 それでは、ムラタさん。

○記者 テレビ朝日のムラタです。

傍聴していて解釈を取り間違えといけなないので確認させてください。

島崎先生が議論の中盤で5ページのまとめのところを朗読された場面がありました。この時の議論は、先生方から「安全性の判断として」の一言を削除してほしいというリクエストがあった面が一つと、K断層については活断層とほぼ思っているが、D-1破砕帯全体についてはそこまで言えないので、活断層の可能性があると書き分けた方がいいのではないかという御提案があった文脈だったと思います。そこで島崎先生が「有識者会合として、D-1破砕帯は」と続けて、「安全側の判断」は飛ばして「耐震設計上考慮する活断層である」と考える、その後「影響を与えるおそれがある」と考えるで皆さんよろしいですかと言われた御趣旨は、「安全側の判断として」を削除しましたよという意味で確認をとったのか、それとも有識者の方々の意見はあってもD-1破砕帯は活断層であるというくり方での確認をとったつもりなののでしょうか。

○島崎委員長代理 その議論は2つ、K断層の評価とK断層とD-1破砕帯が一連の構造である

可能性がある、そこでは可能性という言葉が入っています。その両方を合わせた結果、D-1破砕帯が「耐震設計上考慮する活断層である」という結論になる。ですから、全体の構成を確認した上で、最後の結論の部分を読み上げた際に「安全側の判断として」というところを削って、これでよろしいですかと申し上げて、委員の先生方としては科学的な判断であって、ここでは安全側の判断は入っていないと言われたということだと思います。

○記者 そうしますと、鈴木先生や藤本先生が躊躇されていたように、D-1破砕帯について活断層であると断定するような表現を島崎先生は断定でいいのだというお考えなのでしょうか。

○島崎委員長代理 もう一回繰り返しますと、2ステップあるわけです。K断層に関してはこれはもう活断層だと言って構わない、そもそも耐震設計上考慮するというような括弧の必要のない活断層と言って構わないというのがお2人の御意見であります。そして、K断層とD-1破砕帯とが一連の構造と考えられる、あるいはその可能性という言葉が多分入っていたと思いますけれども、その部分があって、それは一連と考えられますけれども、実際調査をして、K断層に関する調査が非常に不十分なために実情が分からないという状況があるわけですから、そこには確からしさがやや低いという面が入っています。それは報告書の中に書いてある部分であって、その2つに立ってD-1破砕帯が耐震設計上考慮する活断層である、すなわち否定できないということでもまとめられたと思います。

○記者 分かりました。

○司会 次の方、いらっしゃいますか。

○記者 東京新聞、カトウです。

委員の方からも話が出ていましたが、当初3ヶ月くらいと思っていたものが結局6ヶ月かかったわけですが、長くなった理由はどういうところにあったとお感じになられますでしょうか。

○島崎委員長代理 これは委員の方からもありましたけれども、今回のこの件に限っては結局K断層が非常に重要なものですから、その評価をすることがこの取りまとめの中心的な位置にあるわけですがけれども、それに対する事業者さんの調査がある意味遅かったといいたいでしょうか、なかなか進んでこないという状況があった。

○記者 それと事業者側さんの方の調査が遅かったということもそうですが、事業者さん側の方から反論の機会というものを繰り返しおっしゃっていて、なおかつ自民党さんの方からもそのような話があったかと思いますが、そういうことは影響はありましたでしょうか。

○島崎委員長代理 事業者さん側には当然十分理解していただきたいし、誤解のないように説明したいと思います。それから、事業者さん側も新しいデータを出されたことがあったことが相まって時間がかかったと言われるのは時間がかかったわけですがけれども、

その時その時点で適切に考えて進めた結果がこのようになったということです。

○司会 よろしいですか。それでは、すみません、時間になりますので最後お1人、オカダさん。

○記者 毎日新聞のオカダと申します。

今回の報告書は耐震設計上考慮する活断層であると、現行の指針、原則に則った判断だと思うのですがけれども、逆に今までこういう結論にならなかったのはどうしてだというふうに、なぜ今こういう話になっているのかはどう考えていらっしゃるかというのを教えてください。

○島崎委員長代理 やはり規制委員会というものが、いわゆる推進側と切り離されて新しい法律のもとに作られたということが一番大きいと思っています。

○司会 よろしいですか。

○記者 逆に言うと、今まではどういう問題があってこういう話が出てこなかったとお考えですか。

○島崎委員長代理 私がその問題を繰り返すまでもなく、例えば国会事故調の報告書をお読みいただければと思います。

○司会 よろしいですか。

では、以上で会見を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

—了—